イナゴ類

イナゴ類にはコバネイナゴやハネナガイナゴ等が存在するが、本県の水稲害虫として主に見られるのはコバネイナゴである。水田内で見られるバッタ類では、コバネイナゴの他にコバネササキリ等のクサキリ類もいる。イナゴ類は触覚が太くて短く、体長の半分にも達しないが、クサキリ類の触覚は細くて体長をはるかに超える長さなので、簡単に見分けられる。

１　被害のようす

幼虫から成虫までイネの葉を食害する。幼虫は、イネがまだ小さいうちから加害するため、集中加害を受けると食べ尽くされてしまうことがある。成虫は、葉色の濃いイネを好む傾向にある。幼虫と異なり食べ尽くされることはないが、上位葉が加害されると登熟に影響する。また、成虫は密度が高くなると穂も加害することがある。

なお、クサキリ類も葉を食害するが、その被害は出穂前後の穂の下茎部や穂にも及び、下茎部が加害されると白穂となり目立つ。

２　発生生態

年１回発生する。畦畔の土中で卵越冬し、6 月上旬頃からふ化し始め、イネや畦畔のイネ科･カヤツリグサ科雑草を食べて 70 日程度で成虫となり､7 月下旬から水田内に侵入する。成虫は 30 日程度の産卵前期間を経て、卵塊（50 粒弱）で産卵する。

天敵にはクモ類やカマキリ類、ダイズの害虫であるマメハンミョウの幼虫等がいる。

２　防除方法

ふ化直後の幼虫が多数見られる場合は、水田内の畦畔から 2～3m に薬剤を散布する。出穂期以降は他の害虫（斑点米カメムシ類等）との同時防除で行う。

写真１　コバネイナゴ成虫

写真２　コバネイナゴ幼虫